

剣道から学んだこと

フェンシングの伝統

フェンシングを始めたのは、1956年、11歳のときだった。当時の生活は、欠伸（あくび）をしながらのパリのサントニ教会の早朝ミサと夕方のフェンシング道場に二分されていた。その間、リセ・コンドルセ（リセは日本の中学・高校に相当。リセ・コンドルセはパリの有名校で、サルトルが教鞭を執っていたこともある）で勉強した。

早朝の墓地の静けさのなか、フランスの王、王妃の棺の間を歩き、王子、王女の白い大理石の顔をしばしばと眺め、フランソワ一世の心臓の安置されている石柱やジャンヌダルクの剣の前で立ち止まったものだった。それらは私の寡黙な家族だった。

授業が終わると道場に駆け込み、先生に稽古をつけてもらい、仲間と休まず練習した。有名な道場だった。気をつけてゆっくり歩かないとぶつかってしまうほど世界選手権者の数が多かった。後に私もその仲間入りをすることになるのだが、その頃はあんぐり口を開けながらも、しっかりと目を見開いて先輩の剣の語りを無言で讃えたものだった。

当時、礼儀は極めて重視されていた。試合では3人の審判と対戦相手に丁重に礼をし、片手に剣をとり、脚は直角に開き、左手は頭上から後ろに回し、体は消して斜めに構える。まだ“血の一滴”の規則が残っており、勝敗は刃の最初の一触れで決まった。決着がつくと勝者も敗者も手袋をとり相手の手を握る。

凱旋主義は許されず、いろいろと気を配った。

フェンシングは、すでにスポーツでありながらも、騎士道の長い歴史と人間の成長への心遣いがあった。武道を通しての精神的価値の追求が教育を補充してくれていた。

私は、フランス貴族の末裔であった祖父母に彼らの伝統で育てられた。つまり、長男は国の宗教を守るよう司祭に、次男は国土を守る軍隊に、三男は家族の財産を守る管理人と文学の人に。私の場合、男の子は一人だったため、聖歌合唱隊、フェンシング、哲学を同時に学ばされた。この厳しさ、孤独、夢想、現実離れが、20年後の、今では自分の国のような気がする日本との思いがけない出会いを準備してくれることになった。朝の坊主、昼の哲学者見習い、夜の騎士としての修行はすべてその出会いに備えるためのものであった。

フェンシングとの決別、剣道との出会い

フェンシングの審判が電気仕掛けの機械に取って代わられたのは、1976年のことである。審判や相手に感謝することなく、勝利の熱狂がグロテスクな劇を演じるようになったその瞬間から、フェンシングの人間的要素は現代スポーツに呑み込まれ、その伝統を捨ててしまった。あれほど愛していたにもかかわらず、フェンシングに魅力を感じられなくなった私は、きっぱりとやめる決心をした。

フェンシングとの決別はフランス文化との別離を意味した。23歳のときに母国フランス

獣医、剣道六段

クリスチャン・ドランジュビル (Christian D' Orangeville)

1945年、パリ生まれ。カナダ在住。
元フェンシングヨーロッパチャンピオン、
元剣道世界選手権カナダチームメンバー・
アシスタントコーチ。獣医学の著書多数。



を離れるきっかけとなった1968年の社会的政治的無秩序（5月革命。パリ大学が学生に占拠された）への絶望感がさらに増幅された。

フェンシングを心の片隅に埋葬し、空白の数年が過ぎたが、武道への思いは消えることがなかった。そうしたある日、かつてアフリカの灼熱の太陽の下で隣人のフランス人建築家が見せてくれた剣道の防具と竹刀の記憶が、彼の言葉とともに突然、蘇ってきた。「いつかやってみるといい。これこそ、君のためのものだ」——それが、剣道を初めて意識した瞬間であった。

同じ頃、もうひとつの出会いがあった。三島由紀夫である。偶然読んだ仏訳版の作品がきっかけで、彼の主だった作品や伝記はすべて読破した。三島が割腹して果てた三島事件（1970年）は芸術的、革命的行為であり、フランスのシュールレアリスム（無意味な言葉で終わってしまうのだが）の完成された日本版である。三島は、マテリアリスム（物質主義）の世界に生きる耐え難い苦しみの中で最後の自由を行為で印した。常軌を逸した行為にもかかわらず、彼の行動、論理、母国日本への永遠の郷愁、政治的闘いは、私の国にはない実存主義の闘いである。

三島を通じて日本の文化、とりわけ彼が愛した剣道に魅せられていった私は、「剣道にはフェンシングにはないマインド、深い精神性がある」と思うようになった。

剣道への思いを募らせた私は、やがてモントリオールの日系2世が経営する道場の扉を

叩いて剣道の真似事を始めた。しかし、自分がイメージした剣道とはどこかが違った。日本を訪れ、本物の剣道に触れたい。痛切にそう思った。そして、3カ月後、矢も楯もたまらなくなって、“約束の地、日本”に向かう機上の人となった。1982年、37歳のときである。

警視庁武道館での剣道修行

真っ先に、三島が剣道を修行していたという講談社の野間道場に彼の足跡をたどったが、思い出の欠片（かけら）は微塵もなかった。私の思いを察した人が三島が切腹した市ヶ谷の自衛隊に連れて行ってくれた。しかし、当時の日本は三島事件をすっかり消化し、排泄してしまっていた。

それから間もなく、偶然に警視庁の武道館の階段を昇り、剣道場の最後列の正座の列に滑り込むことができたのは幸運であった。

震えるような沈黙。凜と張り詰めた空気。師範は、彫像の如く動かず、一列に並んでいる。穏やかな、集中した顔が朝陽を受ける。この美的瞬間を生きる男たちは何者なのか。日本の伝統文化の数々の魅力的瞬間のひとつであることを知ったのは、後のことである。長い間の稽古がもたらす精神と肉体の見事なまでの調和が感じられた。

私が求めているものはここにある、と直観した。三島が剣道にのめり込んだ理由がわかったような気がした。前にも増して剣道が好きになった。素晴らしい防具、粗野さ、徹底

剣道から学んだこと

した鍛錬、正当な勝敗、結果より大事な過程、大きさを刻みつけた謙虚さ、稽古の価値を証明する2人の男のコミュニケーション……。

警視庁の稽古では、先生たちに絶望され、素振りをするよう鏡の前に立たされた。剣道の基本である中段の構えは、“フランス風にわか仕込み”の私には不自然だった。道場の門下生は皆笑ったが、私には初心者への元気づけと賞賛のように受け取れた。違っていても理解されているのを感じた。

先生たちはやさしく、あたたかだった。稽古の後、電車に乗り遅れてまでも袴の襷の折り方を教えてくれたり、忍耐強く姿勢を直してくれたり、黙って竹刀をくれた先生もいた。アパートまで布団をかついでくれた先生もいる。また、近所の礼儀正しい、働き者の、いたずらっぽい老人たちと一緒にいると、我が家で寛いでいるようだった。彼らは、稽古帰りの惨めな体を楽にさせ、和ませてくれた。

剣道の思い出は、さりげない日本人の寛大さと人間らしさに結びついている。

残心、稽古、一本、修行といった、練習を重ねるうちに穏やかに結果の出る、他国語に翻訳できない言葉こそ、日本の純粋な概念といえる。文化的財宝ともいうべきその価値観は、シュールレアリスムや実存主義と同様、普遍的なものである。

警視庁の武道館はプロのための道場で、本来は四段以上でないと入門が許されなかった。そのため、隣接した町道場を紹介され、籍を移した。そこは、先生ご夫妻も門下生も庶民

的で家族的だった。仲間は辛抱強く友情を分かち合いながら、のびのびと稽古していた。

彼らにとって、剣道は当たり前のものだったが、私は稽古の度に緊張していた。ちゃんとしているだろうか、迷惑はかけないだろうか。私の本格的な修行が始まった――。

人生の一部となった剣道

その後は年に何度か定期的に訪日して東京・春日の町道場に通った。毎年京都で開催される格式の高い剣道大会も欠かさず見学した。多くの剣友が生まれ、日本人の妻も得た。段位も上がり、カナダチームの一員として世界剣道大会に出場するようにもなった。剣道は今や、私の人生の一部といってよく、息子と娘も剣道を愛している。

私は動物の治療をする。天職である。鳥の脚の骨折も治療すれば、雌猫の帝王切開、犬の内臓の治療もする。仕事の質への剣道の影響は大きい。道場で戦術を考えながら、ある相手から他へ移るように、ある動物から他の動物へと移る。忍耐力、細部の繊細な観察、患者への配慮は、夢想家の性格に打ち勝ち、適宜な戦術を選び、善し悪しを判断するのに役立つ。剣道における有意義な構え、無意義な構えは、理にかなった稽古を通して体で学ぶ。治療や手術も同じである。また、稽古をすればするほどよく働けるし、働けば働くほど良い稽古ができる。

仕事と剣道は、2つのつながった器である。

片方がもう1つを満たしてくれる。私はこのようにして、剣道を仕事に、そして人生に活かしている。私にとって剣道は、かけがえないものである。精神が萎えたときに目を覚まさせてくれる“肌に刺さる茨”といったらよいだろうか。

日本の伝統芸の普遍性

私の見るところ、大方の日本人は自分を低く評価し、内に閉じこもりがちである。しかし、私は、日本人は類まれな卓抜した国民であると確信している。天然資源もない国土に住みながら、剣道をはじめ、生け花や茶道など、世界に光を与える普遍的な価値を作り上げた。それだけでも賞賛に値する。

これらの伝統芸は、芸術的であるばかりでなく、民主的かつ平和的な財産である。それゆえ、多くの外国人をひきつけ、世界における評価も高い。

ところが、最近、日本ではこれらの伝統芸を本気で学ぼうとする人が減っていると聞く。せっかく世界に冠たる文化があるのに大事にしないのはもったいない。日本人としてのアイデンティティを再確認するためにも伝統芸に励んでほしいと思う。そして、失われたものを取り戻してほしい。

その意味で私は、みなさんに、ぜひ、剣道という井戸の汲み桶の綱を引いてみてもらいたいと思っている。日本の偉大な文化、武道思想と理論、謙虚でもあり獐猛でもある日本

人の洗練された感性、母国愛、普遍の価値が汲み揚がってくるはずだ。

剣道の気合も、聞いてみてほしい。不必要なモノを詰め込まれ、膨れ上がったお腹、そのくせ近代化には飽き飽きした、貴国の真実と苦痛の叫びが聞こえてくるはずである。気合は、日本の普遍の魂を宿し、唄っている。

稽古はしないまでも、近所の道場でしばし、時を過ごすことだけでもおすすめする。床を磨いたり、皆の世話をしたり、静かに眺めたりしてみる。何かがきつと得られるはずだ。その道場に自分の子供が通っていれば、顔を合わせるだけであった子供たちや近隣の人と会話ができるようになるかもしれない。

足元を見失った日本人に

はるか離れたカナダから我が愛する日本を見ていると、ときに歯がゆい思いに捉われることがある。日本人としての誇りや独自の伝統の重みを忘れ、唯々諾々と他の大国のルールや技術を模倣しているだけのような気がするからだ。日本の現在の停滞の原因は、多くがその一点に帰するように思われてならない。

「日本人よ、もっと自信を持て」と言いたい。あなたたちには素晴らしい伝統とそれを現代に活かすだけの知恵がある。剣道だけではない。経済や科学技術においても然りである。どうか、そのことを忘れず、もう一度足元を見つめ直してほしい。日本に対する感謝の思いを込めて……。